

早稲田大学審査学位論文
博士（人間科学）
概要書

状態像の差異に応じた認知的評価に基づく
非自殺的な自傷行為からの回復プロセスの検討
Investigation of the recovery process from
nonsuicidal self-injury in terms of cognitive appraisal
tailored to differences in clinical features

2021年1月

早稲田大学大学院 人間科学研究科
飯島 有哉
IIJIMA, Yuya

研究指導担当教員： 嶋田 洋徳 教授

非自殺的な自傷行為 (nonsuicidal self-injury ; 以下, NSSI) とは, 自分の皮膚を切る, 刺す, 火傷させる, 身体を叩く・硬いものに打ち付けるなどの「自殺の意図なく, 自ら故意に, 自分自身の身体に対して損傷を加える行為」であり (International Society for the Study of Self-Injury, 2018), 中長期的な自殺既遂の重要なリスク要因となる問題行動の 1 つである。NSSI に対しては, 認知行動療法に基づく理解および支援の有効性が示されつつあるが, NSSI における状態像の多様性が十分に考慮されていないことや, 回復プロセスが不明瞭であることが課題としてあげられる。本博士学位論文は, 行動の維持要因 (機能) の観点から NSSI における状態像の差異を記述し, NSSI に関する認知的要因が NSSI からの回復に及ぼす影響性を状態像ごとに検討することで, 認知行動的要因が NSSI からの回復プロセスに及ぼす影響性について明らかにすることを目的とした。本博士学位論文は, 全 7 章から構成される。

第 1 章においては, NSSI を含む自傷行為の概念および定義の変遷, 自傷行為の国内外における疫学研究, 自傷行為と自殺の問題や精神症状との関連性, NSSI に対する理解と支援に関する知見について概観したうえで, 従来の NSSI に対する理解および支援に関する研究の課題点が整理された。具体的には, NSSI に対しては認知行動療法をはじめとする機能的アプローチによる支援の有効性が示されつつあるが, (1) 自傷行為者の状態像の特徴や差異が十分に考慮されていないこと, (2) NSSI の治療・回復メカニズムが不明瞭であることが課題点として整理された。課題点 (1) に対しては, NSSI の維持要因である「機能」の観点から状態像を整理することの有用性が指摘された。課題点 (2) に対しては, 行動の選択に影響を与える, 行動に対する「認知的評価」の観点から, NSSI が選択・実行されなくなる, NSSI からの回復プロセスを検討することの有用性が指摘された。

第 2 章においては, 第 1 章であげられた先行研究の課題点を踏まえ, 本研究における検討課題として以下の 3 点が整理された。具体的には, (a) NSSI の機能に基づく自傷行為者の状態像の整理分類およびその特徴の記述がされていない, (b) NSSI に対する認知的評価の構成要素が明らかにされていない, (c) 状態像の差異に応じた, NSSI に対する認知的評価と NSSI からの回復との関連性および, 認知的評価が NSSI からの回復に与える影響性が明らかにされていない, という 3 点があげられた。以上の検討課題を解決することを本研究の目的として, その臨床的意義と研究の構成が示された。

第 3 章では, 検討課題 (a) を解決するため, 本邦における NSSI の具体的な方法について整理したうえで (研究 1), NSSI の機能を測定する日本語版ツールとして日本語版 *Inventory of Statements About Self-injury* (以下, ISAS) を開発し, NSSI の機能に基づく状態像の分類およびその特徴の記述を行った (研究 2)。具体的には, 研究 1 においては, システムティックレビューによって国内における自傷行為に関する調査研究を抽出し, 22 編の研究論文から 87 片の NSSI の方法に該当する記述を抽出した。これを整理分類した結果, 〈切る〉, 〈刺す〉, 〈焼く〉, 〈打つ〉をはじめとする 11 のカテゴリーが生成された。これに従い, 以後の研究における NSSI はこの 11 種類の行動として定義された。研究 2 においては, 過去に NSSI の経験を持つ大学生等 592 名に対して, ISAS (Klonsky & Glenn, 2009) を翻訳した日本語版 ISAS などへの回答を依頼した。データ解析の結果, 日本語版 ISAS の信頼性と妥当性が確認された。また, 自傷行為者は NSSI の機能に基づいて「習癖異常群」「苦痛対処群」「自己保全重複群」「対人要求重複群」の 4 群に分類が可能であり, より多くの機能が重複した状態にあるほど重度の自殺リスクや精神症状を有することが明らかとなった。

第4章では、検討課題 (b) を解決するため、NSSI からの回復に関与する NSSI に対する認知的評価の構成要素をボトムアップに抽出し (研究3)、その結果得られた概念をもとに、NSSI に対する認知的評価の測定指標の開発を行った (研究4)。具体的には、研究3においては、過去に反復的な NSSI を行った経験を持ち、直近1年以内には NSSI を行っていない大学生等 12 名を対象に、「自傷行為を行った結果や、自身が自傷行為を行うことに対する評価や考え」に関するインタビュー調査を実施した。データ解析の結果、NSSI に対する認知的評価として、4つのカテゴリーに分類される、11 の概念が生成された。これらの概念をもとに自傷行為に対する認知的評価尺度 (Appraisal of Self-Injury Scale ; 以下、ASIS) の項目原案を作成し、研究4において、過去に NSSI を行った経験を持つ者を含む 376 名の大学生等に回答を依頼した。データ解析の結果、「他者への配慮」、「自傷への固執」、「効果の限界」、「自傷の有用性」、「他者評価懸念」の5因子 19 項目から構成される ASIS が開発され、信頼性・妥当性が確認された。

第5章では、検討課題 (c) を解決するため、認知的評価と NSSI からの回復との関連性に関する仮説モデルを生成し (研究5)、状態像の差異に応じたモデルの検証および精緻化を行った (研究6)。具体的には、研究5においては、過去に NSSI を行った経験を持ち、直近1年以内には NSSI を行っていない大学生等 23 名を対象に、NSSI からの回復に伴う認知的評価の変化についてインタビュー調査を実施した。データ解析の結果、認知的評価のうち、自傷への固執の評価が NSSI からの回復に中核的に関与する仮説モデルが生成された。研究6においては、過去に NSSI の経験を持つ大学生等 481 名を対象に、日本語版 ISAS および ASIS などへの回答を依頼した。データ解析の結果、仮説モデルが支持され、自傷への固執の評価が NSSI からの回復に影響することが示唆された。さらに、認知的評価の他の因子と NSSI からの回復との関連性には状態像による差異が存在することが明らかとなった。

第6章では、引き続き検討課題 (c) を解決するため、第5章で示されたモデルをもとに、認知的評価と NSSI からの回復の因果関係を短期縦断調査によって検討した (研究7)。具体的には、過去1年以内に NSSI を行った経験を持つ 20 歳代の者 90 名を対象に、1ヶ月の期間をあけて2度、日本語版 ISAS、ASIS などへの回答を依頼した。データ解析の結果、NSSI が苦痛対処だけでなく自己保全や対人要求の機能をあわせ持っている状態像において、自傷への固執の評価が NSSI の実行の程度を予測することが明らかとなった。

以上の結果に基づき、第7章では、総合的な考察が行われた。まず第1節において本研究の結果が整理された。第2節では、本研究の臨床心理学的意義が論じられ、状態像に応じた NSSI に対する支援方略が提案された。第3節では、本研究の限界を踏まえた今後の課題が論じられた。最後に、第4節では本論文の人間科学に対する貢献として、従来より文化人類学および精神医学の観点から考察されてきた自傷行為という人間独特ともいえる行動に対して、本論文は、臨床心理学的観点からその状態像の差異および回復プロセスについて記述することで、生物・心理・社会モデルの観点から自傷行為をより深く理解しその支援に関する知見の発展へと寄与するものであることを論じた。

以上